

温故知新

其の五 猿払漁業の始まり

「猿払といえばホタテ、ホタテといえば猿払」となった猿払村の漁業ですが、ここに至るには、一朝一夕というわけではなくたことは、村民は勿論、道内・国内でも広く知られているところです。

今回の温故知新は、その漁業について、主に黎明期について記載します。限られた紙面では、書ききれないことが多いことは承知していますが、様々な行政資料や文献等の中から、平成五年に刊行された、太田金一元組合長の著書『猿払の海に生きる』を主要な参考文献とし、漁業の隆盛に欠くことのできない人物も含めて紹介する内容としました。

先駆者たち

見原長吉、渡辺善七、細越山三郎、森安太郎・硯治親子。多くの漁業者の中でも、村史などにも登場する人たちです。猿払村営牧場からエサンベの海岸を見下ろすかのように顕彰碑が建っています。国道沿いなので、見かけた方も多いと思います。前述した、見原長吉を讃える碑で、「功労者 故見原長吉氏之碑」と刻まれており、当時、稚内漁協組合長の岩田直蔵ら5名によって、昭和十七年に建立されました。功労者として顕彰碑が建てられた見原長吉の功績が、どれ程のものであったかが推測されます。明治後期、ニシン漁で活気あふれる猿払の浜で、時代漁網が損傷し、復旧も進まず、沖揚げもできなかつた見原の漁場を再開させ、漁期の終わりにはエサンベ一番の漁場にしたのが、渡辺善七と細越山三郎でした。そこ

から、見原長吉の漁場が繁栄し、多大の功績を残していったのです。一方、造材事業で大成功をおさめ、サケ定置、ニシン定置を経営し、一代で財をなし、一代で倒産・財産処分をした傑物が、森安太郎です。娘婿の森硯治は、後に猿払のホタテ漁業に大きく貢献した人物となります。

漁業の基幹

猿払の漁業史としては、ホタテが先行していたようですが、ニシン・サケ・マス・イカ・ナマコ、サメなども明治後期には、活況を呈し、次第に漁業者や加工業者の自力もついて、干し貝柱は当然としまして、身欠きニシンや数の子、ニシン粕、塩引鮭や新巻鮭などが出荷され、小樽や松前、本州の新潟・敦賀・舞鶴など日本海側から山陰地方まで、木材運搬用の積取り船によって運ばれました。

石川県内灘村漁民の入漁

猿払村の漁業に大きな影響を与えた内灘村（現内灘町）漁民の姿は、明治期前半から大正初期にかけて、数百隻にも及んだとされています。猿払村史や内灘村史には、当時の様子が記録されていますが、内灘村には当時の隻数や使用漁具の細かな内容、漁場の賑わいなどが記されています。漁法も、桁網を投入し潮流を利用しながら八尺を曳くという、無動力船時代における苦労を重ねながらの漁であつたと記録されています。



功労者 見原長吉の功績を讃える碑

石川県人「入漁禁止」の事態

浜が活気を帯びる一方で、当然その情報を得て、猿払沖でのホタテ漁を試みる人も増えましたが、漁法や貝柱生産などの技術に優れた内灘漁民とは格段の差があり、また家族ぐるみで故郷を離れて働く石川漁民の根性は圧倒的であつたとされています。大正期になつても内灘村周辺から千人を超える漁業者が訪れ、内灘村以外にも、猿払近隣から多くの漁業者が操業し、大正五年には戦前最高の漁獲量を記録するも、三年後に大減産、大正九年の禁漁を経て十一年には復活したものの、以後低迷期を迎える。このような背景の中で、各漁協間での駆け引きが表面化し、猿払沖での操業に厳しい規制がかかり、結果として石川県から多くの船の入漁にも大きく波及し、宗谷漁業組合長から内灘村長あてにホタテ入漁禁止通知が出されることになりました。その後、糸余曲折を経て協定書・契約書等の締



浜ではばんば競走が盛んに行われていた

次号では、猿払村の文化・娯楽について掲載を予定しています。



資料展示の様子（旧浜猿払小学校）



海岸に沿って民家が立ち並ぶエサンベ



ホタテ干し貝柱生産風景



ホタテ漁の出漁風景